

GR  
白雲軒

とりお



44

昭和54年1月1日

埼玉 名栗

宗教法人  
白雲山

鳥居観音

# 表紙の説明

## 不空罽索観音 昭和32年完成

本堂内七観音の内、向って左奥にまつられてあります。

不空とは「衆生の心願空しからず」の意で衆生を救われる、み手を八本お持ちである。

開祖 桐江先生作

## とりゐ第44号目次

裏表紙	春の行事案内と案内図	十七
鳥居観音だより		十七
寄進・奉安		十五
新年互禮		十四
田舎医者(其二十四)	見川鯛山	十一
西遊記(其三十七)	岡部千三	八
観音行の实践	光山善雄	五
道光禪師御法話(其二十六)		二
新年のごあいさつ	開祖 平沼先生	一
表紙	不空罽索観音うら説明	

一九七九年

## 新年のごあいさつ

八十八翁平沼桐江

皆様、明けましておめでとうございます。昨年中はいろいろとご協力賜りましてありがとうございます。さて、私は本年おかげ様で米寿を迎えることができました。

これこそ神仏のご加護と信じ、毎日感謝しておる次第であります。

ことに私が半世をかけて、観音信仰を負って、当山の開山に着手しましてから、観音様は常におそばから、支えて下さったそのお蔭と、信仰のありがたさに深く感激をいたしております。

鳥居観音もお蔭をもちまして、諸堂、塔も完成し環境の美化も、県下は勿論、関東にもまれな存在となり、年々信仰人の登山も多くなつて参りました。

私はこうした施設が、将来人々のために益するものではあるまいかと信じております。

物質文明、科学文化はすでに世界の先端を行っているといわれます。その日本国にとって、今必要なものは、精心の開発こそ急を要する問題ではないかと、いつも心配している者です。

信仰とは信ずることです。信じ合う人によって、うつくしい国家社会がつくられるのであります。

本年は私のために、信仰を通じて、寿像建設に多大なご支援を賜り、その銅像の除幕式を迎えべく、工事も着々進んでおります。

多くの方から厚いご支援を賜りますことに對し、開祖として心から感激し、心から感謝いたします。

今後、当山が、益々信仰され、体力づくりにも役立つ場として親しまれ、人々から愛されて、益々発展いたしますように、皆様方のお力によって、育てていただきますようお願い申し上げます。

本年は私にとりまして特によるこびと感激の年であります。簡単ですが新年のことばといたします。



「自己」

(其の二十六)

「故に自己の本性は本来空なることを知れば、生老病死なく、又苦楽愛着なく、得脱自在清浄の本体に帰すべし、」と

この文章は、よくわかると思います。要するに、本来無一物の本体界であるのに、現象ができてくると、それに眼がくらんで本来無一物という、広い世界を見うしなう。そのはじめを仏教では無明といい、これから迷いのやみを、たどるのであります。

眼、耳、鼻、舌、身、意とはわれわれにあって、主観のはたらきをさせる機関であります。したがってわれわれが、外界に接触する機関として、そういう道具を持つことは、けっこうであるが、これにとらわれると、自我の利害の渦にまきこまれて、得脱

自在をうしなう。これが現在、凡夫生活の苦しみられるところだ。それを「一度その形を現わす時は眼、耳、鼻、舌、身、意のために、その本性を蔽われ、無明の心を以て本体となし、これを基礎として事物を判断するを以て人我に執着する」と申してあります。

このように、自我の主観にとらわれるから、その眼、耳、鼻、舌、身、意の対境にまよいます。それを「色（かたちのあるもの）声、香、味、触にとどまって、常見に墮し貧瞋痴の三毒と、財色食名睡の五欲とのために苦役せられて、ついに豁然たる自己の本性を夢想にだも見ることに能わざるに至れり」というのであります。

常見というのは、主観と客観、すなわち自分と物の存在をどこまでも肯定することで、それがいつまでもそのまま存在するかのような、すなわち常在というところであつた見解（執見という）におちいる結果、ついには三毒煩惱がおこり、それにふりまわされて、自由自在の仏心の世界を見うしなうてしま

っている。これが世間の姿であります。ゆえに、一度仏心にかえれば、平等であるから、そこにはおれが、われがという執着がとれて、なごやかな世界があらわれるのです。

親子は形がちがうが、親の子に対する真心の上では親子一体でありますので、子供がオギャアと泣くと、親の方にピンとただちに感じます。しかし他人となると、おたがい自他のへだてがありますから親子のよいなわけにはいきません。ゆえに仏心がひらけると、すべての人に対して親の、子に対するごとく、広い親しい心の世界があらわれるのです。

ある人が「親の心」という題で絵を描きました。それは赤ん坊の前において、母親が口へなにかもって、たべさせようとしているところの表情を描いていました。それが真に親子の愛情を表現した会心の絵ができて、自分でもたいへんよくできたつもりで、ある人に批評を乞うたところ、その人はこれを見て、「これは、まだ親子一体のころもちが現われておらん」といいます。「なぜか？」というと

母親が口をむすんでいる。ここにまだ心情のへだたりが見える。母親が赤ん坊の前にすえて、口をあけさして、なにかやるときは、その母親もこどもにつられて、知らず、知らずの間に、口をあけていなければならぬものである。ということをついたといふことであります。そこがすなわち仏心の姿です。

仏は一切衆生を平等に、わが子とごらんになっておられます。だからわれわれも、その仏心に目を開くと、世界が広くなります。自他のへだてがくつろいで、抱擁的な平和の世界が実現します。しかし自我の世界は、これと反対に、猫の眼のちぢむように小さく小さく、自分の我執が執にとじこって、他人に好きざらいができ、排他的になり「おれが、おれが」ということから、ついには自分の存在も苦しくなると、この世の中から消えていかなければならぬような、きゆうくつなものとなります。

だから、われわれは精神の修養をして、心の世界をひらかなければなりません。その修養に二つの方面があるというので、第四に「安静と活動」という

修養の指導が示してあります。

八

そこで、精神の修養をするには、「安静」を先にします。このごろはいろいろな修養法ができてきましたが、なにをやっても、みな原理はひとつです。それは精神を統一してかかることです。凡夫の心は妄想動乱といって、たえず散動しています。この散動の精神をしずめれば、本心の光が出ます。それを般若の知慧といえます。その本心の光にふれる修養は、安静でなければなりません。精神を静めれば、しずめるほど、静寂な本心の光が、はっきりしてきます。ちょうど水が動いていけば、顔をうつしても変にゆがんで見えますが、水が平らに静まると、はっきりりと、目鼻から毛一本までがうつります。だから精神を統一するところに本心の光と姿とを見る。ことができるのです。そこで安静の修養のしかたを教えて、

「安静とは自己の本性をさとり、静かに心神を養

うをいう。自己の本性を知らんと欲せばよろしく自己の本来空なることを悟るべし。自己の本心空なることを知らんと欲せば、色声香味触法に迷うことなるべし、色声香味触法は迷いの本源にして無明の由って生ずる所なり、色声香味触法に迷わざらんと欲せば、眼耳鼻舌身意の為に使役せらるることなきを要す」と申してあります。

自己の本来空なることを悟るべしというのは、前から話してきた、空がわれわれ本来の姿であるからであります。そこで、「本来空なることを知らんと欲せば、色声香味触法に迷うことなるべし」というこれは我々は、たえず外界の事物に迷わされているすなわち、聞けば聞くところに、見れば見るところに、いろいろと妄想に迷っています。そのとらわれから放たれるところに、本心にかえる安静の修養ができる。それでまず、この外界の誘惑をはなれよとあるのであります。つぎに、

「さて静養の法は、心を静め気を落付、非思量にして鼻息静かに通ずべし」とあります。(以下次号)

# 観音行の実践

兵庫 県

光山 善雄

## 念彼観音力

つづき

江州の慈門尼の草庵に盗賊が入りました時、慈門尼はやさしい言葉で、こんな寒い夜にお腹がへつては戦は出来ないからご飯なりと食べて、ここにあるものを持って行かれよ。お膳を作って泥棒にさし出しました。泥棒は思いがけないご馳走に預りました私の言いたいことは、お前は若さと元気な身体を持っている。お前にも親なり兄弟もあろう。又女房や子供もあろう。今夜の事件がわかるとお役人は必ず獄屋に連行するだろう。

こうなると皆さまに大変めいわくがかかるから、今晚限り泥棒職をやめて、正業につきなさい。

泥棒は慈門尼の教誨を拜聴し更生道に入りましたこれこそ観音力を念じなば即ち慈心を起さんの味で

あります。

○

世間をさわがせたラバラ殺人事件が一年三ヶ月目にわかったと、昭和四十年二月十二日新聞は発表しました。記事によりますと人間の両足が名古屋で発見されたのは、昭和三十八年十一月十八日で、大阪で胴体が発見されたのは、昭和三十八年十一月十九日で、又大阪の大和川で両手が発見されたのは、昭和三十九年一月二十四日でありました。

犯人は大阪府の井上温清（ほんきよ）三十二才とわかりました。被害者は肉親の温清の兄、井上与太郎でした。

胴体と足がつめられていた、箱の中にあつたうす紙が解決の糸口になりました。温清は「兄が強いノイローゼになっていたので、押えつけたら死んだと申しており、フトンの上から押えつけて寝たら、昭和三十八年十一月十八日午前一時頃、目をさますと隣りに寝ていた与太郎が冷たくなって死んでおり、鼻血を流しておりました。犯行をかくすため、死体を処理することを考え先づ、死体を清め、包丁と両

刃のノコギリで切断して洗剤用のアキカンに頭を入れて、右手と左手は段ボールにつめ麻ひもで荷造りしました。又両足はうす紙に包んでナシ箱に入れ、毛布をかけて線香の代りにローソク一本を入れました。胴体も同じくうす紙に包んで、衣装箱に入れ、又衣装箱には着ていたシャツも入れました。死体の処理は午後二時に終つたと申します。両足を入れた箱を持って近鉄上本町より名古屋に行き午後五時頃、東海道線のガードのそばに捨ててから自宅に帰り、その後、胴体の衣装箱を持って新今里公園に行き、民家の軒先に胴体を出して捨て、カラの箱を持って明方に家に帰つたと申します。顔と両手は自宅においたが次の日に風呂しきに包んで持ち出し大和川の川原を掘って埋めたと申します。このバラバラ殺人事件のカギとなつたのは死体を包んだ、たくさんのうす紙でした。宗教心があつたら、かかる大惨事はなくてすんだと思われませんが、人間の世界はおそろしいことです。

牛や馬が人殺しをしたり、放火したり盗賊となつ

たり悪口をいったりはいいたしませんが、人間の世界にあることは残念でなりません。

「泣いた目も、にわか光る、形見分け」で、金銭のためには父子兄弟姉妹が争う刃を持つてこの火坑ひまなの世界を平和な世界にするには正しい宗教の信仰より他にないと思ひます。今こそ信仰の聖火をかかげて民衆を教化すべきであります。

「或は枷鎖かさりに囚禁しゆせられて、手足に桎梏ちゆうかくを被らんに」枷鎖とは手足の枷、鎖はくさりである。家があれば家が枷鎖となり、財産があれば是も苦の種子、家族があり子供があつてもこれも枷鎖となり、山に逃げて海にかくれても苦悩の枷鎖から脱することはできないのが人間であり、物があつてもなくても苦の種子であります。学者、名譽、財産等の肩書も枷鎖の一つになることがあり、お金もないくせに新築した。又美人を嫁にもらつた。これも皆枷鎖の病にかかった人でありましょう。

手足に枷鎖にて困っている人、泣いている人、観音さまと一体となれよ、釈然として解脱できる。



呪詛諸の毒薬に身を害せられんとする者も、念彼観音力と念ずれば還つて呪うた人にお罰がつくとあります。世界は明るくなって文化生活は向上しても呪いは昔も今も変わりません。病気を治してやるという呪禁、お金を儲けさせてやるという呪禁、良縁を世話するという呪禁性名判断の呪、きつね下し呪こんな呪……」にかかる人はお人よしに多く、又、お人よしに向くように出来ています。呪のかからない、物に迷わない、智慧のある人間になることが大切で、宗教は心の改心であり人間の一大事であり、空念仏や空砲に終つては命中せない、ほんとに一大事と気がつけば、うかうかしてはおれない。遊んでばかりはおれない筈です。「汝らなすべきは努力なら」の教訓を味わいましょう。

○  
英国の元首相ロイドジョウチは幼にして父を亡くし、妹と母と共に叔父さんの家にて生活しました。貧乏生活で一個の卵を二回に分けて食べたと申しま

す。叔父さんは厳格な教育家で、ジョウチに与えた箴言に曰く、「神を畏れよ」「弱者をしいたげるな」の二つを少年時代に心にたたきこまれた教訓ですから、後年名宰相として世界に名声を博するにいたつたのであります。それ故、私達も観音経を心の支えとして又心の鏡として信心生活を実践すべきです。

### 世間の苦を救う

「或は悪羅殺、毒竜、諸鬼等に遇わんに、彼の観音の力を念ずれば時に悉く敢て害せじ」

羅殺とは食人鬼と申し善事を妨害する者は心の羅刹であります。

山陰の妙好人源左同行の写真が出来ましたので、それを持って源左同行に見せましたら、これは美男子に写っている。どこの方じゃ。これは源左さんの写真ですよと申すと源左同行は不思議な顔をして、これはちがう、人ちがいだと申され、ワシはこんな「よい男」ではない。ワシの顔は……その写真に角の生えた鬼顔を書いて、これがわしの顔だ。(以下次号)



# 西遊記

(其の三七)

岡部千三

ばしょう扇

つつぎ

悟空は、すぐに、もとのほら穴へもどって考えた  
そして、きんと雲にのって飛べば、五万里位はたち  
まちのうちである。

「おや、孫悟空だね。またきたのか？もう一度ふ  
きとばされたいのだね。」

らせつ女は、ばしょう扇で、ばたばたやったが、  
こんどはためである。定風丹を身につけた悟空は、  
もうびくともしない。らせつ女はおどろいて、ほら  
穴のおくへ身がるにげこんでしまった。

悟空は、虫になって、そのあとからむくむくと、  
はいつて行った。らせつ女が茶をのもうとしてい  
のを見て、茶わんにとびこんだ。茶といっしょに、  
らせつ女の腹へはいりこんでしまった。

悟空は、

「ばしょう扇をかしてくれーい、かさなければ、  
でてやらないぞ、おれさまはなァ」

腹の中からどなった。どなりながら、どたばたと  
あばれるのだから、らせつ女は腹をかかえてくるし  
んだ。

「くるしいよ。いたいよ。ばしょう扇をかしてあ  
げるから。そこから早くでておくれ。」

「うまいことをいって、この悟空をだます気なん  
だろう。そうはいかないぞ。」

「ほんとに、けっしてうそなどいわない。たのむ  
から、でておくれ。」

くるしさにそこをらせつ女はすわりこんで、自分  
の前において、大きな口をあけた。

悟空は、ぼいととびだして、ばしょう扇をしっか  
と手に持って、

「これさえあれば、用はない。あばよ。」

悟空は、法師のところへもどってきた。法師や、  
八戒は、まだあついあついといっていた。

「いますぐに、少しずつしてあげますからじっとしててください。」

こういって、ぼしょう扇であおぐと、どうしたわけか、すこしもせずしくはならない。火のいきおいは、いよいよよつよくなつて、悟空の足の毛まで、ちりちりもえだしたのである。

「やられた、だまされた、うーむ……………」

悟空は、やっと気がついた。らせつ女にわたされたのは、にせのぼしょう扇だったのである。

「にくいらせつ女め、さてどうしてくれようか、よし、このうえは牛魔王に談判して、きつとほんものぼしょう扇をかりてやるぞ、いやといえば、うでずく、力ずくでやるぞ、」

悟空は、牛魔王のすんでいる魔雲洞というほら穴へと、とんで行った。

## 牛魔王

「やあ、牛魔王さんよ、こんにちは。」

悟空は、牛魔王を見ると、ていねいにあたまをさ

げていった。

「牛魔王さん、ひとつ、ぼしょう扇をかしていただけませんか。山のあちらへいく、だいな用があるのですが、あつくて、あつくて、もうとてもだめです。」

「だって、おまえ、火炎山に火をつけたのは、おまえなんだよ、わかっているのかね。」

牛魔王は、にたにたわらいながらいった。

「えっ、そんなことはありません。」

「知らないとはいわさないぞ、五百年の昔の話だ太上老君の炉の火を、下界にけとばしたあばれものあれはいったいだれだったかな？」

「あっ、あのとときか。」

悟空は思いだした。天上界をさわがせたことを、炉の火をけとばしたのが、もつとで火炎山の火になっていようとは——わるいことはできないものだ。悟空はそのときのことを思い出した。

悟空が、ぼんやりと、むかしのことをかんがえているすきをみて、牛魔王がにげようとしたので、

「まった、まった。」と悟空はすぐおいかけた。

「まったたまるか。」

牛魔王は、にげるのが早かった。どんだんにげてほら穴の中へかくれてしまった。

「これはこまった。」

悟空は、しばらくかんがえこんでいたが、何を思いついたか、へへへ、と笑った。そして、自分が、牛魔王のすがたになりすまして、らせつ女のところへいった。

「ばしょう扇は、こちらにあるかな。孫悟空が、あれをほしがっているので、しんばいになったからようすを見にきたのだが。」と悟空の牛魔王は、すましていった。

「そのことなら、しんばいはありません。ばしょう扇は、わたしが、このとおり持っています。」

らせつ女は、じゅもんをとなえて、すこし大きくしたばしょう扇をだした。すると、つと手をのばした悟空は、すばやくひったくっておいて、ほんとうのすがたにかわった。

「これがほしかったのさ、さあかりていくよ。」

悟空が、おぼえたばかりのじゅもんをとなえて、一丈二尺にのばし、やつこらしよとかついでいるところへ、どこからか、八戒がでてきて、

「悟空のきょうだい、大きいうちわだな。」とひやかした。

「うん。大きくしすぎたよ。小さくするじゅもんをしらなくてこまっているのだ。おまえ、かわってかついでくれ。」

「よしきた。こっちへわたしてくれ、どっこい」八戒がばしょう扇をもったかとみると、たちまち牛魔王にかわってしまった。

「あつ牛魔王。八戒にばけてきたのだな、だましな。」

「そのとおりだ。おどろいたか。悟空。こんどはゆるさんぞ。」

牛魔王は悟空をふきとばそうとしたが、悟空には定風丹があるから、いくらばしょう扇であおいでもとばすことができない。

(以下次号)



## 田舎医者 (其の二十三)

見川 鯛山

空然、父ちゃんがこつちをにらんで怒った。

「民生委員の保護だと！ おらァやだ、おらァ絶

対にやだそんなもん、だれがそんなやつなんかに」

「だってあんた、いいじゃないか。だれだってみんな、そうしてるんだぞ。平気だよそんなこと」

「ほかの奴ら平気でも、おらァやだ！！ だれがな  
んていったって、おらァやだぞ！！」

と、金三郎は酒くさいつばをぺっと土間へ吐いてそれつきりもう私と口をきかなくなつた。そしてかみさんもそつと目をつぶって、その青白い顔を汚れたボロぶとんの中へかくしてしまつた。

私は、その後も、たびたび金三郎の小屋へ寄つてみた。

「いやなあにね、ついそこまで往診にきたもんで

ね、で、どんなあんばいだきょうは？」

言いわけしながらかみさんのふとんをまくると、そこから腐つた肺が生ぐさくにおい、うすく平べつたい胸が苦しげに速い呼吸を続けて、もうすっかり絶望の結核だつた。

「ン、まァそんなに悪くはないな、この調子なら春までにはずつとよくなりそうだな」

私はそういつて、気やすめの、ほんの気休めの注射を彼女の骨と皮膚だけの腕へ射つた。だが、二月のある寒い朝、かみさんは最後の血を枕の上に吐きつくして死んだ。金三郎の知らせを受けて私がかけてつけたとき、血の気のないそのろうのような白い死体はもうとつとくに冷たくかたかつた。そして金三郎はそのかたわらに突つたままおしのようにだま

り、うつろな、焦点のない目ですすけた壁ばかり見  
ていた。

翌日。彼は庭の隅の深い雪を掻き分け、凍ってい  
た黒い地面をがむしゃらにくだいて、深い土の温み  
の中にかみさんを埋めた。そして幾日も、土まんじ  
ゆうのその墓の前で赤い箸を立てた山盛りのごはん  
と、りんごが一つ、石のように堅く凍ったまま吹雪  
にさらされていた。

そのころ、金三郎の酒はにわかにもその量を増し、  
彼はますます無口に、偏屈にひねくれていった。

やがて春がきた。金色に輝く柔らかな光が、木の  
芽をふくらませ、ふくよかに桃の花を咲かせると、  
そこから早春の鶯が鳴いた。すべての雪だけが終り  
金三郎の石ころ畑がふたたびその跡に元のままの姿  
で現われはしたが、彼は今年もまたそこを耕そうと  
はしなかった。

朝、やもめの金三郎はコトコトと麦の飯を炊き、  
スコップをかつき道路工夫の大きな弁当を腰にまき  
つけて那須温泉へ出かけていった。

そして、その道を夕べには酒を買って帰り、暗い  
彼の小屋で一人、酒をあたたためて飲んだ。

天皇・皇后様が御用邸へこられたのは、ちょうど  
金三郎がそんな状態のときであった。そして彼は、  
その行列を県道とお成りの道の交錯する四つかどで  
見送りながら、そこを警護する若いお巡りさんとや  
り合っていたのだった。

「ふん、なんだあの馬鹿さわぎア。いまだきだれ  
がなにをやらかすもんかってんだ。ピストル持って  
警察があんなにくつついて歩かねえだって、だれも  
なにもしゃしねえだ。警察じゃにせ札だの人さらい  
だので手がまわりきれねえなんていってやがるくせ  
によ。お巡りさんあんなに余ってんでねえか。あんな  
だだってそうだべ？　こんな山ん中の四つかどさ何  
時間もボガアと突っ立っててよ、馬鹿げたことだと  
ア思わねえのか？」

道路工夫の金三郎が大声で叫びかけたが、その若い警  
護の巡査は目をパチパチさせたまま返事もできない  
でいた。

「な、そうだべ？ 陛下様はただ息ぬきに遊びにこられただけなんだぞ。なにもあんななものものしくやんねえだっていいだ!! それなのによなんちう馬鹿やろうだ、あの金魚のウンコみてえに後ろからゾロゾロくつついて行きやがるやつら!! ああいうやつらに陛下様のほんとの気持ちなんざこれっぽっちもわかっちゃやないねえだ。みんな手前たちの見栄と、つまらねえしきたりであんな馬鹿なことやってるんだ。それも、おれたちの税金で買った自動車と油つかいやがってな!!」

金三郎が一気にしゃべると、やっとその区切りを見つけて、若い巡査がいった。

「な、なんだ君アいったい？ 不敬だぞそんなこと、陛下に対してひどすぎるぞそれア!! 君ア共産党か？」

するとがくぜんとして、金三郎がいった。

「きよ、共産党だとおれが!! なんだっておれが共産党になんないやなんねえだ？ おらアそんなもん大嫌いだ。第一おらア、共産党なんて、一体全体

さっぱり何も知りアしねえど!!」

「ほんとか、そりア？」

「ほんとだともさ。うそだと思うからおめ、この辺のやつらにだれにでもきいてみる。おらア逃げもかくれもしやしねえ、見ろほれ、あそこのとうもろこし畑んそばの、御用邸とは隣り組みてえに、いちばん近えあの小屋がおれんちだ」

と金三郎がさしたそのふしくれ立った人さし指をその後ろから鉄砲でねらうように若い巡査がのぞくと、そこに、やっぱりあやしい国旗も出しておかない彼の小屋があった。

「ふーん、あれか？ なるほどな。君アやっぱりおれが思ったとおりだ!!」

と、こわい顔になって巡査が振り返ると金三郎も負けずに怒って言った。

「なにがやっぱりだ。じゃアなんだな、あんたはまだおれこと共産党だと抜かしやがるのか」

「だってそうじゃないか、見てみるほれ、ほかの家じゃどこだってみんなな、

(以下次号)





# 平沼先生壽像建立

## 協賛芳名

(第一二二号)  
(五三、一二、五現在)  
敬称略

金額(千円)	住所	芳名
五〇〇	名栗村	平沼 宏之
一〇〇	与野市	長島 恭助
一〇〇	比企郡 大和拓友会 代表関口嘉作	
一〇〇	新宿区	桐木 光三
一〇〇	武蔵野市	内田桂一郎
一〇〇	世田谷区	山崎 完
五〇	所沢市	野村 嘉好
一〇〇	浦和	藤沢 帝

金額(千円)	住所	芳名
五〇	仙台市	鬼 春人 嘉子
三〇	中央区	東洋護謨化 学工業(株)
三〇	立川市	小林 徳久
三〇	所沢市	福島 宗賢
二〇	飯能市	渋谷自動車 工業(株)
二〇	五日市町	鈴木 嘉三
二〇	西多摩郡	宮沢庚子生
二〇	青梅市	小峰 久治

金額(千円)	住所	芳名	金額(千円)	住所	芳名
二〇	葛飾区	江端 政吉	五〇	名栗村	岡部 千三
二〇	所沢市	小山権之丞	二〇	名栗村	平沼 幸一

右表計 二一名 一、四八〇、〇〇〇円  
 一万円以下協賛 一三九名 五八五、〇〇〇円  
 合計 一五九名 一、九六五、〇〇〇円  
 前回報分 一、三九五名 一四、〇六五、五〇〇円  
 合計 一、五五五名 一六、〇三〇、五〇〇円

### 御礼

江湖有縁の方々からお寄せいただきました篤いご協賛に  
 対しまして、心から厚く御礼申し上げます。  
 除幕は平塚先生の本年米寿を迎えられますのを機に、好  
 季更めて、ご案内申し上げたく存じております。 合掌

壹万体系観音奉安者芳名

(五十二年十一月現在)  
敬称略

般若心経納経者芳名

(五十二年十一月末現在)  
敬称略

住所	区分	芳名	住所	区分	芳名	数	芳名	数	芳名	数	芳名
浦和市	A	富田五一	大田区	B	山本勝男	二〇	平沼とみ	一	一村久恵	二	滝田トキ
船橋市	A	高島幸男	秋田市	B	兼子喜代子	七	佐々木文助	一	広木一恵	一	三本晨翠
千葉市	A	戸村菊夫	狭山市	B	島津サカエ	二	佐々木礼子	一	松丸ハナヨ	一	戸沢勝子
川越市	B	高橋章	八王子市	B <sub>3</sub> 体	渡辺勇	一	佐々木浩由	一	大野幸二	二	朱涅香江
練馬区	B	佐々木喜久治	保谷市	B	鈴木春子	九	滝口常右工門	一	土屋正勝	一	鈴木美禰
足立区	B	片桐愛子	大宮市	A	中村和代	〇	若林とく	一	立石美代子	一	青木ふみ
日立市	B	新井勝治	高松市	B	森和雄	〇	武石許子	一	高田トミ子	一	松葉義徳
品川区	B	比佐野マス	浦和市	B	野本昌男	〇	岡部錦子	一	平沼顕美	一	松葉ミキ
秩父市	A	内田政雄	大田区	A	須山うめ子	一	野本昌男	一	平沼とよ	一	千田芳子
北区	A	江口良司	杉並区	A	野崎真澄	〇	田島賜	一	戸口きよ	一	野口育子
練馬区	A	高橋一美	東久留米市	A	浅見昭正	四	長井覚	一	水谷和子	一	古津敬幸
"	A	高橋弘子	江戸川区	A	鳥井富美子	一	新井フジ	一	中島利	一	小沢サヨ
秋田市	A	石塚清之助	右	A型	一四体	湯沢伝	一	永峰富美子	一	天野千恵子	
青梅市	A	清水勲	計	B型	二四体	宮崎せい	二	永峰美子	一	上野美恵子	
大宮市	A	蓮裕幸	前回迄	八、五五七体	三八体	畑カノ子	一	永峰志津子	一	法華経巻物三卷	
立川市	B	高田トミ子	総合計	八、五九五体	二四体	天野秀雄	一	加藤寿男	一	柏木 亘	
飯能市	B	小森谷金造	お勤め			山田キヨ	一	大石勇太郎	一	右計 一四四卷	
日高町	B <sub>2</sub> 体	齊藤郁夫	毎朝お経があげられてい			中川りつ子	一	永村四郎他	一	前回迄 八、五四六卷	
大井町	A	藤本俊明	ます。ご先祖のご供養の			木口重男他	一	齊藤晴夫	一	総計 八、七九〇卷	
飯能市	B	松坂金次郎	ため、今後ともご奉安を			清水アサ	二	石戸谷暁子	一		
岐阜市	B	高山恒雄	お勤め申し上げます。			清水裕子	一	石戸谷よしき	一		
浦和市	B <sub>2</sub> 体	田島賜				齊藤智恵子	二	広瀬秀雄	一		
入間市	B	浅見きみえ									

## 鳥居観音だより

### 終了した行事と参拝状況

十月一日、(日)大和拓友会役員会開催、役員九名来山、椿苗木百本奉納と銅像に協賛の協議等あり。

矢島武一様銅像の協賛のため来山。

十月二日(月)井上竹吉様より銅像協賛金受領。

高松市、森和雄様より壱万體観音申込受。

十月三日(火)原進様外二名果物奉納

齊藤捨様より銅像協賛あり。

十月四日(水)齊藤定次様来山

十月五日(木)坂口清博様銅像に協賛、

とりゐ(四十三号)着荷。

十月六日(金)岡部仲次郎氏銅像協賛あり。

十月七日(土)長島恭助様より銅像ご協賛拝受。  
十月八日(日)宮岡伴吉様より新米ご奉納あり。  
小峰久治様より銅像ご協賛あり。

十月九日(月)鈴木嘉三様より銅像ご協賛あり。

十月十日(火)紅葉一分位となるも来山者多し。

十月十一日(水)入間郡町村議会事務研究会を庫

裡の広間で開催、来山二十名。

十月十二日(木)桐木光三様より銅像ご協賛あり

十月十三日(金)黒田利平様祈禱に来山。五人分

十月十六日(月)枝久保鶴四郎様銅像協賛に来山

十月十七日(火)月例法要十時、参拝者及び入山

多数となり、紅葉も三分位となる。

内田、山崎様より銅像のご協賛あり。

十月十八日(水)川崎市より来山多数。

十月二十日(金)開祖平沼先生ご夫妻来山、本堂

参拝と山内巡拝紅葉を探勝された。

金沢様より銅像ご協賛あり。

十月二十一日(土)保谷市、浦和市より参拝多数

黒田利平様祈禱に来山八人分修行。

十月二十二日（日）埼玉トヨペット家族慰安会を  
観世音センターに開催、多数の方々が参拝入山。



昭和27年落慶した仁王様の阿像 桐江作

紅葉始めた白雲山の遊歩道から入られ、子育て地  
蔵と仁王門前あたりから、大鐘楼、玄奘三蔵塔、大  
観音を眺めて、口々に歓声を発しておられた。

紅葉の葉うらを返す風の音

ふまえ立つ阿像の口に秋の風

そんな句を詠んで見晴し台の方へ登って行った人  
もあった。

仁王尊の威風はいかにも山の守りにふさわしく、  
紅葉探勝人は仰ぎ見て門をくぐって行った。

十月二十三日

（月）紅葉も五  
分となる。

成瀬講元畑様  
から銅像協賛を  
受領。

観光バス二台  
立寄り参拝。

十月二十五日

（金）戸田東小

学校児童一五〇  
名バスで来山。

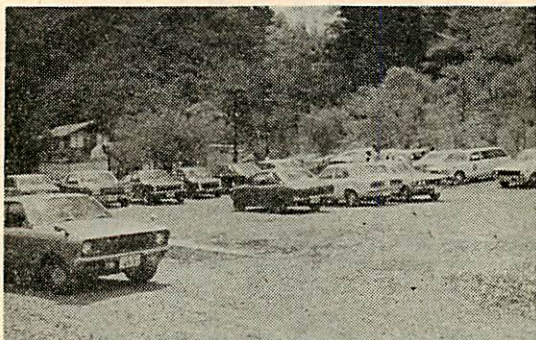
飯能岡部由次

郎様銅像協賛来

山。その他一般入山多くなる。

十月二十八日（土）鳥居観音物故役員法要、

午後一時本堂に於て、尾尻、有馬、鯨井三御老師



拡張した当山の駐車場

によって、当山開山以来の物故役員二十三名の特別法要を修行した。

参列者平沼花子様、宏之様、町田芳三、岡部元治、浅見茂治、佐野正助、石井松次の方々が列席され、げんしゅくにとり行われ、後庫裡で四方山のお話の一時をすごされ、供養塔婆をそれぞれお持ち帰りいただいた。



紅葉は三蔵塔附近から

十月二十九日、  
(日) 秩父路への観光客が、当山の紅葉を見てこんなきれいな紅葉は珍しいといっていた。  
来山者日毎に多くなる。  
十月三十日、  
(月) 石井利司様外十三名、銅

像に協賛あり。

十月三十一日

(火) 吉田仙太郎様、銅像協賛に、江崎先生参拜来山。

十一月一日

(水) 広瀬様来山、永井様から

秋季例祭に奉納

拜受、紅葉前線は山頂から次第に染められてくる。

十一月二日(木) 高橋、三宅様来山奉納あり。

その他一般入山多し。

十一月三日(金) 文化の日、秋以来の多数の入山

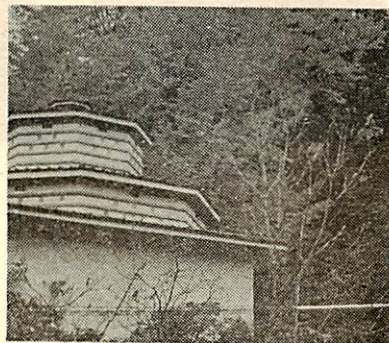
及び参拜となる。平沼清儀様より銅像協賛拜受。

十一月四日(土) 野崎様より一万余体観音奉納、

鈴木様写経折本申込あり。山もにぎわう。

十一月五日(日) 秋晴の最高の日和となる。

大和拓友会総会、椿苗一二〇本奉納あり。



鳥居文庫わきのいちょうの黄がうつくしい

江崎元堂先生、小川勘兵衛先生参拝御奉納受、

山内の紅葉は最も見頃となつて、入山者多し。

十一月六日(月)黒田様祈禱に来山。

十一月七日(火)平沼先生ご夫妻ご参拝、紅葉の山内を一巡された。

紅葉の探勝に毎年たのしみにして来られた人も多かった。

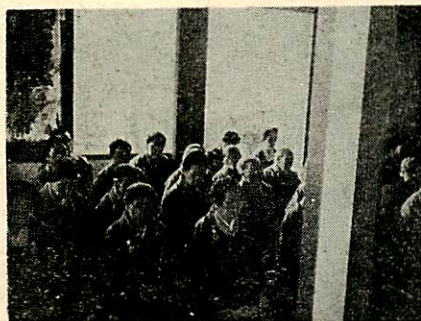
十一月十三日(月)青梅講中代参で、宮沢庚子子様外八名参拝奉納及び銅像の協賛を受く。

十一月十六日(木)秋季例法要供物を川越市の、  
亀屋山崎嘉七様より奉納あり。

十一月十七日(金)秋季例法要修行 十時三十分  
紅葉の盛りは過ぎたが、種類によつて見頃なもの  
あつて、参拝の人々は本年は又格別なうつくしさだ  
と、おどろいていられた。

受付には地元役員が係りとして奉仕されていた。

開祖平沼先生ご夫妻を始め、埼玉トヨペット(株)  
の社長、副社長、日本火災(株)店長各位、所沢講中  
長小山権之丞様、浦和講元藤沢帝様のご一行五十名



地元梅花流の人達の奉詠

当山役員、今津政雄、若林とく、町田仲太郎、平沼幸一、吉田仙太郎、杉下受吉、佐野正助、浅見達次郎、矢島武一、岡部敏、野本栄治、岡部安一、の諸氏がそれぞれ係員として担当していただいた。導師は尾尻、有馬、鯨井の三老師、詠歌は名栗、梅花流会員三十五名の奉詠朗々相和しておごそかに進められた。

引つづいて山頂の救世大観音堂内法要が修行され  
正午に無事終了した。

香煙は秋空にゆらいでとんで行き、秋空の中に消えて行った。参拝の人々は思いの道を辿つて、最後の紅葉を心ゆくまで探鑑された。

中食もセンターに入られてとられた方と、山内でとられたり、庫裡の広間で歓談しながら、平沼杉之助、平沼玉枝、山崎まりえ、小林政勝、寺尾長吉、小山権之丞の諸氏が食事をおとりになった。

十一月十八日(土)小竹町の老人会の保田様が、引卒されて一団の参拜と、江端様外十三名のご来山で庫裡はにぎわった。

夕刻広瀬電機の社長広瀬様もご来山いただいた。

十一月十九日(日)紅葉の残りがすばらしくよいと来山多し、自動車入山も多い。

十一月二十日(月)黒田様祈禱に来山。

銅像の協賛多数拝受、田辺、野村、大館、加藤、林、の諸氏より。

十一月二十四日(金)埼玉県博物館連絡協議会が十時から開かれた。

会場は庫裡の広間で、出席者は埼玉県教育局から丸山教育次長、埼玉県立博物館の江袋館長、吉川主事、平山学芸員、県文化財保護課秋葉主幹、の諸氏と、川越蔵造り資料館、三峰山博物館、荒川村歴史

民族資料館、丸木美術館、川口市立児童文化センター等からも主任が出席された。

午前当山の文庫をくまなく見学されて、重要文化財と沢山な資料におどろぎの目を見張られた。

当山もその会員の一つであるので、これから益々見学者が多くなる状況である。

十一月二十五日(土)元旦祈禱の申込受付、老万休観音者申し込受付。

十一月二十六日(日)三信工業服部社長来山、小山権之丞様流灯法要の写真奉納持参。

十一月二十七日(月)松田江畔先生より新年の祈禱申込あり。

十一月二十九日(水)飯能小川文雄先生来山、その他参拜人多し。

十一月三十日(木)越生講長小森様より元旦の祈禱申込多数 其他参拜多し。

銅像協賛あり。小山権之丞、鬼春人夫妻の諸氏、紅葉狩りも本日を以て終了す。俳句の書かれた、短冊がいろいろあせて、淋しく小枝にひらめいていた。

十二月一日(金) 元旦祈禱受、武州商事様、寺尾様、鈴木嘉三様。

十二月二日(土) 元旦祈禱伊藤正雄様外受。

十二月三日(日) 祈禱米山吾野南川石田様。

十二月四日(月) 元旦祈禱受、東海工業様。

十二月五日(火) 入間郡文化財保護委員の主事会議を庫裡に開催、出席者十四名、文庫見学、文化財保護に関する協議あり。

十二月六日(水) 平沼家従業員物故者の供養の為本堂に於て修行、施主平沼宏之、物故者四十三名、午後二時、導師有馬、尾尻の老師によって開始、

平沼先生ご夫妻、花子、宏之、澄子諸氏のご参列によってねんごろな供養が修行された。

供養と云うことは因縁あればこそ行われることであるが、なかなかできないことであつて、それを実行することは、信仰なくしてはできないことである

十二月十日(日) 大黒祭午後一時、

白雲山奥の院大黒殿に於て修行、初冬の山内は静かに、参拝者にはお守りをさし上げた。

十二月十一日(月) 元旦祈禱受付多し。

十二月三十一日(日) 第二回の除夜の鐘修行

大鐘楼落慶第二回除夜の鐘、午後十一時三十分、現地広場にかがり火を焚き、檝台を置いて、参拝の人には甘酒をもてなした。

十二時十分前から尾尻老師が読経と共に第一の百八の鐘をつかれる。それにつづいて、三十秒を置いて参拝者が、かわるがわるに撞木をもって力一ぱいにつきすすんだ。

静かな闇の中に、かがり火が人々の顔をうつし出す。

百八の鐘は昭和五十四年一月一日午前零時三十分のうち終えた。

参会者はおたがいに新年のあいさつを交わして、下山して行つた。

去年から今年にかけての間に百八のぼんのうを掃うという宗教行事のおごそかなものに参加しようとする人は毛呂山町からはせ参じた方もあり、近くの善男善女子供さんも参加されるのが多くにぎわつた。



## これからの行事と花のお知らせ

一月一日(月)新年元旦祈禱、十時

除夜の鐘に明けて、清浄な気が満ち満ちている。

受付けた千数百の諸願が書き込まれた。名入りの木札が、ま新しく本堂にかざられて見える。

尾尻、有馬、鯨井三老師によって、きびしい祈禱が開始されれば、自然と身も引きしまり、寒さもどこへやら、

十一時終了につづいて庫裡で、新年の祝杯をくみかわし、おせち料理、お雑煮等もてなす。習慣をつづけている。

元旦はまだ明け初めぬうち、善男、善女、威儀を正して村の神参りをすましてから、最後の参拝をして、おみくじを引いたり、破魔矢を求めたりされる服装もいろいろ、様々で、時代の流行のはげしいことを教えられる。

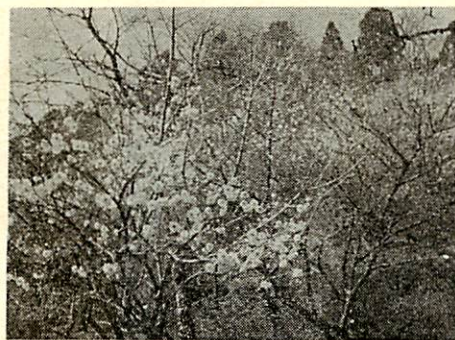
南天の実のうつくしき寺の庭  
初春や庭の香ろの香をそでに

二月三日(土)節分、午後三時

年男 尾尻天外老師、救世大観音から、玄奘三蔵塔、平和観音、大黒殿、仁王門を経て、本堂に至り三時豆蒔きの計画です。

二月十五日(木)ねはん会、一粒万倍日

もう春なのですが、冬のねむりはまだ。でも、時々笹鳴きがきかれます。午后一時ねはん会修行い



梅の花が開く二月

たします。  
庭のちんち  
ようげのつ  
ぼみが赤く  
ふくらんで  
くる。  
れんぎょう  
の黄も枯庭  
の中にぼっ  
かり、うか  
んで咲いて  
きます。

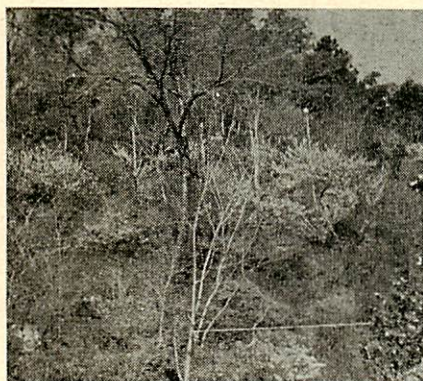
三月の彼岸、境内のぢんちょうげの花のつぼみが赤くふくらみます。

彼岸二十一日には戦没者の法要をいたします。

庫裡のまわりの梅の花がほころび、れんぎょうの花が目をはきまします。

三ツ葉つつじのつぼみがふくらんできます。

時折りうぐいすが、近くの植え込みにきてなきます。そのようなひるさがり。春がきたのに気づき、



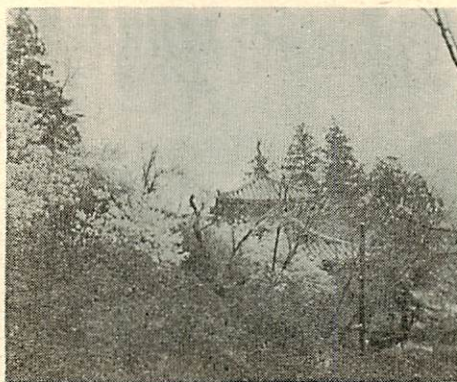
百花咲く白雲山麓

よるこびと  
たのしさが  
自然とわい  
て来ます。  
暑さ寒さも  
彼岸まで、  
昔から云わ  
れているこ  
とに変わりが  
ありません  
皆様のご来

山を今からお待ちします。

つつじまつり

四月一日から五月末まで、つつじまつり開催、



三ツ葉つつじ

二ヶ月間つ  
つじの花と  
新緑とでま  
さに一大絵  
巻をくりひ  
るげる、信  
仰はもとよ  
り、自然を  
求める人を  
お待ちしております  
います。

とりひ  
編集兼  
発行人  
印刷所  
発行所  
第四十四号  
発行日  
昭和五十四年一月一日  
埼玉県入間郡名栗村  
鳥居観音  
岡部 千三  
浦和市仲町二一八―十五  
武州印刷株式会社  
鳥居観音 電話 〇四二九七―九一〇四一七

# 白雲山

鳥居観音  
観世者センター案内図



## 春の行事

- 新春祈禱 1月1日～3日 10時
- 彼岸法要 3月彼岸中日 13時
- つつじまつり 4月1日～5月31日  
みつばつつじから紅つつじと咲き次いで信仰と行楽に最適
- 玄奘三蔵塔法要 4月17日 10時30分
- 春季例法要 5月17日  
本堂 10時30分 大観音 11時30分
- あじさいとふじまつり 6月中

ご来山をおまちしています。